

を分裂病群と対照群で比較してみると、分裂病全体で解析すると両群間では有意な差は認められなかった。次に、遺伝負因の有無、発症年齢の高低、重症度の違いで分裂病群を各々2分し、対照群と比較してみたが、やはり有意な差は得られなかった。今回の結果から、DAD4 受容体遺伝子と分裂病の関連性は否定的であった。

## 12) 最近5年間の新潟大学精神科リエゾン外来の臨床統計

中野 靖子・横山 知行	(新潟大学精神科)
細木 俊宏・伊藤 陽	(小出本田病院)
稲月 原	(五日町病院)
田村 絹代	(高田西城病院)
中山 温信	(大島病院)
多田 利光	(河渡病院)
熊谷 敬一	(佐渡総合病院精神科)
高橋 邦明	(柏崎中央病院)
関 美好	(国立療養所寺泊病院)
小熊 千秋	

1984年3月に新潟大学精神科にリエゾン外来が開設されてから、今年で十年になる。1986年から1988年までの院内他診療科から精神科外来へ依頼された症例の臨床統計は、現三島病院の森田らがまとめているので、今回我々は、その後の1989年から1993年の5年間について調査した。

今回の調査対象は、1989年1月1日から1993年12月31日までの5年間に、院内他科からの依頼で精神科外来を受診した総数760名の患者である。

性別は男性351人、女性409人で、女性が若干多い傾向にあった。外来入院別では入院が367、外来は393で、極僅か外来が入院を上回っていた。

依頼先別では、リエゾン外来が354、精神科一般外来が368、児童外来が35、不明が3であり、リエゾン外来が47%であった。

次に入院群と外来群について、各々の臨床特徴を検討した。

その結果は、入院群では外来群より高齢者が多い、身体疾患に基づいた器質性精神障害と、身体疾患に対する反応性の精神障害が多い、その精神障害は改善しやすいなどであり、これに対して外来群では、身体疾患がないのに身体症状が前景に出ている精神障害と精神症状の明らかな精神障害が多い、精神障害の転帰は不変の率がより高くなる傾向がある、などであった。

今回の結果を、1986年から1988年までに森田らが行った調査結果と比較すると、対象患者総数が年間平均180名であったのに対して、今回の結果では年間平均は152名であり、他科からの依頼件数は減少傾向にあった。その理由の一つとして、他科からの依頼患者に占める精神症状の明らかな精神障害患者の紹介数の減少が考えられる。これは、うつ病などの精神疾患の知識が一般に広く浸透し、患者本人が受診科を正しく選択出来るようになっているのも一因と考えられる。

また、他科からの紹介患者に占める、リエゾン外来患者の比率は、森田らの調査では39%であったものから、今回の調査結果では47%と増加していた。これは、この5年間で精神科リエゾン外来の存在が、一層他科において知られてきたためと思われる。

しかし、入院・外来別のリエゾン外来紹介率では、入院群で41%、外来群で51%であり、外来群の方でより高いという結果になった。本来、リエゾ的な関与がより必要と考えられる入院群において、リエゾン外来紹介率が外来群よりも低い理由は、リエゾン外来が木曜日のみであり、より早期の処置が要求される例では、対応しきれないという事が考えられる。これは今後の課題である。

今後は今回の調査結果を参考にして、精神科リエゾン診療をより充実したものにしていきたいと考えている。

## 13) リエゾン外来受診中に身体疾患の悪化により死亡した症例の検討

稲月 原	(小出本田病院)
田村 絹代	(五日町病院)
横山 知行・中野 靖子	(新潟大学精神科)
細木 俊宏・伊藤 陽	(佐渡総合病院精神科)
高橋 邦明	(高田西城病院)
中山 温信	(大島病院)
多田 利光	(国立療養所寺泊病院)
小熊 千秋	(柏崎中央病院)
関 美好	(河渡病院)
熊谷 敬一	

総合病院のコンサルテーションーリエゾン外来においては、身体疾患を有する患者の精神医学的な診断治療を求められることが多い。これらの患者の中に抑うつ症状を呈しながら、抗うつ薬や抗不安薬にほとんど反応せず、まもなく身体疾患が悪化して死亡する症例が存在する。そこで本研究では新潟大学精神科コンサルテーション・リエゾン外来を受診した症例のうち、身体疾患が悪化し